小林秀雄著『本居宣長』: 三十二章主題《#孔子(詩論:以下壱)⇒#徂徠(以下弐)⇒#眞淵[冠辭考:以下參]⇒宣長[以下肆:#言霊 の,轉義/合體]、へと繼承される #言語観》
及び、その對照としての《理學(宋儒・朱子學)との懸隔理由(以下伍)》・・・その「關係論」的纏め。

壱:①言語の道②詩(物:場‘ C)⇒からの關係:④の註解[#論語 徴]によれば,[凡そ①は,②これ(①)を盡す(D1の至大化)]といふ考へ⇒③:[孔子の眼]⇒③はさういふ處,つまり自在な表現[興之功:言の世界]が,自在な認識[觀之功:事の世界]と結んでゐる處に(即ち,言霊の合體/轉義)まで届いてゐたと⇒孔子(△枠)④徂徠曰く(△枠)。
弐:①言(#言霊)②#道(即ち #古聖人 の #礼楽 と言ふ治績)(物:場 C‘)⇒からの關係:『①は②を載せて(即ち #転義)』⇒『以て遷る(即ち #合体)』⇒徂徠『学則』二。
參:①#冠辭考②#徂徠(物:場 C‘)⇒からの關係:④の①は,⑤の思想に大きく影響.④の文(①)から浮かび上つて來る(D1の至大化)ものは②の言語觀⇒[③:興之功]⇒④が冠辭(枕詞)の名の下に直面したのは,②の言ふ,詩に於ける③[#詩 の用(働き)が盡くしてゐるのは,言語の用の事]であつた⇒④#眞淵⑤宣長。
肆:①言語(物:場 C‘)②言霊(物:場 C‘)③環境(物:場 C‘)⇒からの關係:「①は②といふ自らの衝動を持ち(D1の至大化)、③に出會ひ(D1)、「④:自發的にこれに處してゐる〔『鋭敏に反應』(轉義:D1の至大化)〕」⇒「⑤:姿」(④的概念F)⇒E:事物に當つて、己(①)を驗し、事物に鍛へられて、己の⑤(F)を形成(合體:Eの至大化)してゐるものだ」(③への距離獲得:Eの至大化)⇒宣長(△枠):①への適應正常。

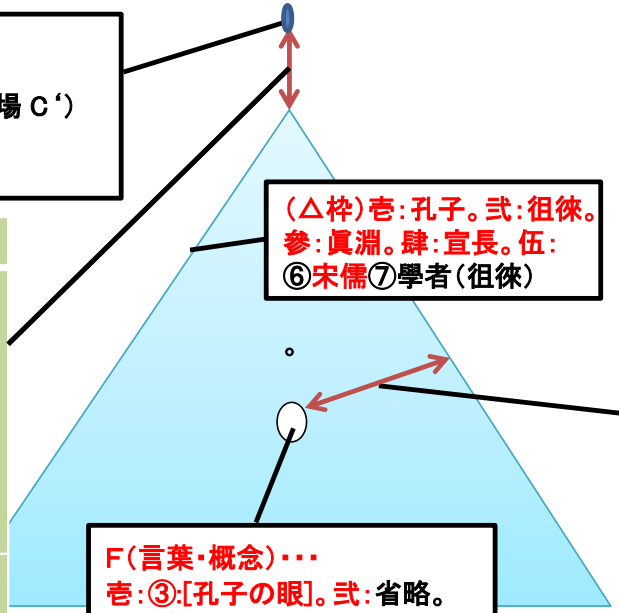
伍:①道(物:場 C‘)②禮樂(物:場 C‘)③古言(『言霊』物:場 C‘)⇒からの關係:「知り難く言ひ難い①(即ち②といふ聖人の治績)を、「❹:⑦の思惟の努力(無私と心眼:D1の至大化)のうちに、③に徴す(D1の至大化)〔とは、P307:古註には『道(物:場 C‘)は禮樂(物:場 C‘)を謂ふ』に徴す、を意味する〕」⇒「⑤:理」(❹的對立概念F)⇒E:それとは對照に、⑥は、⑤を頼む〔とは、自分流に、⑤に還元(Eの至小化:假説附け・定義附け・原理附け)する〕」(⑤への距離不獲得:Eの至大化)⇒⑥宋儒⑦學者(徂徠△枠):①③への適應正常。

(物:場 C‘)・・・
壱:①言語の道②詩(物:場‘ C)
弐:①言(#言霊)②#道(即ち #古聖人 の #礼楽 と言ふ治績)(物:場 C‘)
參:①#冠辭考②#徂徠(物:場 C‘)
肆:①言語(物:場 C‘)②言霊(物:場 C‘)③環境(物:場 C‘)

からの關係(D1の至大化)

壱:「④の註解[#論語 徴]によれば,[凡そ①は,②これ(①)を盡す(D1の至大化)]といふ考へ」。
弐:「『①は②を載せて(即ち #転義)』(D1の至大化)」。
參:「④の①は,⑤の思想に大きく影響.④の文(①)から浮かび上つて來る(D1の至大化)ものは②の言語觀」。
肆:「①は②といふ自らの衝動を持ち(D1の至大化)、③に出會ひ(D1)、「④:自發的にこれに處してゐる〔『鋭敏に反應』(轉義:D1の至大化)〕」。

伍:「知り難く言ひ難い①(即ち②といふ聖人の治績)を、「❹:⑦の思惟の努力(無私と心眼:D1の至大化)のうちに、③に徴す(D1の至大化)〔とは、P307:古註には『道(物:場 C‘)は禮樂(物:場 C‘)を謂ふ』に徴す、を意味する〕」。



(△枠)壱:孔子。弐:徂徠。
參:眞淵。肆:宣長。伍:
⑥宋儒⑦學者(徂徠)

F(言葉・概念)・・・
壱:③:[孔子の眼]。弐:省略。
參:[③:興之功]。
肆:「⑤:姿」(④的概念F)。
伍:「⑤:理」(❹的對立概念F)。

E:〔F(言葉・概念)との附き合ひ方・用法〕・・・「So called」「Fと(△枠)との距離獲得」(Eの至大化)。
～～～